

謠曲拾葉抄

小 鹽
誓 願 寺
杜 若
遊 行 柳
羽 衣

八





小塩

大原野社 在山城国乙訓郡所祭之神同春日社
 二十二社次第云仁壽元年二月乙卯依大皇太后
 御祈建宮柱大原野矣 神祇正宗云人皇五十四
 代仁明帝嘉祥三年為王城守護兩院左府冬嗣申
 沙汰勸請之矣 又云和列春日社遠帝嗣后妃夫
 人有參詣之便故移于大原野矣 右兩説アリ
 伊豫物語云昔二條の后のまごまご宮の足やまふ
 とりたる時氏神ふまごまごひたりふふこのまつり
 うふさやひりりおこなるくのろくおひりつね
 てふ丸車よふまおひてまごまごまごりたる

へ大系や小塩のふもろくふくし世のふもろひつらめ
 此方古今難の部不入。その河を云二条の后より
 東宮のこやとふとふりり時ふ大系船よまふど
 流りの日よありう。方のふ二条の后。小塩宗
 宗啓の時業平に流して此方をよめるこ
 右今業雅お云小塩ふもろふ后の流ありは神代
 のふもろひおこくありめすしんこと神
 代のふもろひおこ。今二条の后友氏を
 此方かふで流るるこ。神もきてじうしと
 ありしことすしんこと。神代のふもろ天照
 右神と云。天照根命は流湯二神の末孫は合
 神の神のこかりしことあり。

江家次男云大系陽の啓起五条后順子以友氏勸
 学院衆為車副二条后高子以姪兼車後在立中将
 書和歌与二条后二条后

へ大系や小塩のふもろくふくし世のふもろひつらめ
 流ゆるりつらふ順のふもろくふくしん

炭とい小塩の炭。小塩のむとらふくしんこと
 出雲のふもろくふくしんことらふくしんことらふくしんこと

へ大系や小塩のふもろくふくし世のふもろひつらめ
 下系色 ぬり橋よほと

昔桓武帝延暦年中山城し訓郡長岡と云ふは

と建つて。大東神社の山。修く花も秋の葉
—あくるしつつけたり。面白の之痛は涙と。あふ
—行ふに江の浦と

大原の乃花梅 古今集推抄云花さうくは梅花
と并ふしつらこき。歌注密勘云梅の色はさ
くくさくさく表白く表花田なり。りきと花梅大
ついで花梅梅花同いりこき

平安帝紀之記云山城の日本の中ふあつて
高天の原と海一海くろ島地なれ。ゆよの小原。
あふの大原と云ふなり。是れ高天の原乃本

花のりき

○中條の世も似る花梅と云ふふり山都より

今と盛りと申ふ花の 申ふ花の夕乃花と云。万
葉集云小本花のさありと云ふり。表の上
或抄云見安云本花と云。花如芙蓉実如
朱杯子き 童歌抄おも

神も交る塵のせ乃 和光同塵のらと竜田よは
まのりき 鞍馬大物よは

古今集云上よ入。忠仁のま。河と云深及の
のあふくよ。花のあふ。梅の花と云。せはくろをん
てあつてき 深及の忠仁の山原。宋推抄云

ハ多氏の祖神也。此神不台敬して天照太神より
すとし。又必伊勢太神之中亦其日より
是の神代より天照太神と云は根命と云陽二
神の末孫也合神のちりひりりくる万民と云は
一神也。東宮の消息不り。語あれは天照と云日
の終り終りし。若と云ひ世をこ。小堀も多氏
のさくつと云え。今日のは事を嫌しく居んと
と。妻家の母儀あれは如世と云え。

▲天孫神の御事よ 妻家及后家のこと御啓と云。
御事ハ天子。御事ハ院也。宮ハ二条の后天孫神を
降られり啓と云。一。御事。御事の御事天孫
御事よと云。

▲在系業平 杜若小記と

▲天の御事ありしや 天地の神乃は代より人の男乃妹背の乃
ハ後と云ぬ

天地の神乃は代よりしつあふ二氏と云
一。天の御事ハ天の御事七代也。地ハ地神八代と持と云。
それハ天の御事七代伊奘諾伊奘並萬男女天皇乃
乃と云くは後と云。又地神ハ天照太神と云は根
命也。天孫神のちりひりりくる万民と云は後と云
一。天の御事ハ天の御事七代也。地ハ地神八代と持と云。
それハ天の御事七代伊奘諾伊奘並萬男女天皇乃
乃と云くは後と云。又地神ハ天照太神と云は根
命也。天孫神のちりひりりくる万民と云は後と云
一。天の御事ハ天の御事七代也。地ハ地神八代と持と云。
それハ天の御事七代伊奘諾伊奘並萬男女天皇乃
乃と云くは後と云。又地神ハ天照太神と云は根
命也。天孫神のちりひりりくる万民と云は後と云

このものもの陰毎よ 海抄えい面彼面とし
あつらひのいさよ 同し海に遊化窟よあきと
あつらひのいさよあり

古
○花根のこのもの小法にあきてあつらひのいさよ
轆ハ跡あつらひとさつらひのいさよ 幸都婆小町よいさよ
天も花よあつらひ 田村よいさよ けりふ人のいさよ
ふらふのいさよ けりふのいさよ けりふのいさよ

和光の教よ業多の花小海一と 花を海交の姿
取し跡あつらひ 阿古根浦に傳え月々けりぬの
分の流ふえ 法性寂光之地をまくと 常波之流
生利益せりも あつらひ伊奘諾言と取し一と

ふとと遠と 業多と此して 男女のあつらひをま
しと 花のいさよと けりふのいさよ

花よさつらひ 揚貴妃よいさよ 月やけりぬ花を林
院よいさよ やことあつらひ人の加茂よいさよ

花よさつらひのいさよ けりふのいさよ けりふのいさよ
花と人よいさよ 伊奘諾言よ業多のいさよ あつらひ

あつらひと名よとあつらひとあつらひとあつらひと
しと 花をいさよあつらひとあつらひとあつらひと
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひとあつらひと
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひとあつらひと
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひとあつらひと

さうこめしといふ一夜ありんとも

秘てりさめてり

○まやこい家やいんあやいんをまうけり秘てりまてり

此の伊弉ノ阿リ。又古今意之よ入後人志と

▲ま乃夜の月あけがの夜うまゆらん

○ま根の月ともいふと世のむのむいよを成むまの曙

誓願寺

誓願寺号大本山始在南都天智天皇御本願開基
惠隱僧都三論宗也桓武天皇遷都之後遷城列深
草里圓空上人改浄土宗則西山立義内深草派之
一本寺也中世後京北舊誓願寺通小川西一旦城
寺田祿文明九年六月造營其後移三條京極今の
堂ハ豊臣秀吉公の愛妾ね丸殿の再興也

大智天皇の方浄土の弥陀如来と云ふに於て
糸うひく。まふ糸誓一糸六千耐夫より女人あまら
生身の弥陀をかうせしむ。賢同子芥子園又子の
脚小糸を糸くもの糸ふより二入一と糸り一糸ふ

夜久く一カスガ日大の終ありしれあく。二人の仏所小交と終
ひ。その後とゆるはる。此れ小ま日シの真仏と号し。ま
之。終る小越前守雅致ニチキが女メ和泉式部ミ齡三十五の時。
小式部とせん。ま。ま。そのあまう。あふ。ま。ま。當ち
小菴ロウキヨ者。念佛之味あり。生ととけぬ。然。而一遍上
人。然也のシ示現シあり。當寺あり。此れと縁縁。一終ふ
時。和泉式部亡靈と成。り。り。り。あ。あ。あ。誓願寺の額と。
六字の名号小あり。ま。ま。ま。當寺の縁起小あり。ま。
者。ま。ま。ま。

半陶菴云京師誓願寺者西方教主无量壽大願王
道場也天智天皇勅創其基殿裏底乃春日慈悲滿
行菩薩之所親刻也尔来八百餘載感應無比矣

△おへの乃も一夢のシ法とやまひらる

おへの乃も一夢のシ法とやまひらる。六十余列とわらる。むら。むら。量
壽經小乃至一念と終り

△是の念佛の行者一遍とイッペンりヒツリくヒ

傳云一遍字知真伊列之河野七郎通廣二男也在
俗時有二妾供幸一日二妾並枕卧時兩婦之髮髻
忽化二蛇喰鬪良久見之大驚拔劍斷之忽矣菩提
心上台峯薙髮シ自知真受學於西山善惠十余年
咸得念佛之教法自是巡迴諸列西抵八角嶋東抵
外濱常唱念佛並陀葉對人不交餘談天性精勤數

月不卧^{アサ}邪沐^{ハクモク}浴不解^{カサ}帶三衣^{サンイ}弊^{シラヒ}每綴^{ツル}籍^{シヨク}人^ニ与^シ衣服^{イフク}替^ヘ
 弃^{スツ}初纏^{ハジメ}衣人^ヲ缺^{カク}供食^{クウシヨク}雖數^{モト}日不食^{クハ}莫^シ乞^ヒ求^メ之心^{シン}建治
 元年^ノ壬亥十二月^ニ来^テ相^テ列^テ藤^ノ沢^ノ講^ノ道^ノ場^ヲ始^メ開^キ時^ノ宗^ノ與^ル
 一遍上人^ト緣^ニ起^リ云^ク伊^ノ与^ノ国^ノ河^ノ野^ノ七^ノ郎^ト通^リ廣^シ次^ト男^ト別^レ并^ニ
 七^ノ郎^ト兵^ノ衛^ノ尉^ト通^リ秀^ト出^テ家^ス而^テ号^ス知^ル心^ノ房^ト一^遍上^人童^名
 松^ノ壽^ノ丸^トと云^フ始^メハ五^ノ名^トり^ーが十八^ノ歳^ノの時^ニぬ^ル善^ク
 惠^ニ上^人小^者と云^フ淨^土の一家^トと試^ムる^ニ十一^ノ年^ニ其^ノ後^ニ
 建^治の比^ニ時^ノ宗^トと建^立と^シ建^長年^中法^師ふ^らり^と
 多^ク同^クく^りあり^らる^には親^戚の中^小遺^恨と^す一^とと^と
 ひ^り有^りく^に殺^害せん^と云^ふら^るに^は痲^とと^りなり^らく^に款^を
 のち^のち^のと^うり^ひひ^ひと^く今^ハと^うり^ふり^らぬ^ん乃^に

始^メ此^ノ事^ト干^シ時^ノ伏^見院^正應^二年^八月^廿二^日於^テ攝^列

武庫^寂も年^五十一^トと^ス畧^一一遍上人^癡心^の始^メ衣^ぬ

況^つづ^まう^是る^哉 聖^の字^ハ遊^リ柳^ノ波^を

我^ハ此^ノ友^ニ怨^妬と^り一^七日^糸菴^尸證^誠殿^小通^夜

て^いひ^のつ^つく^ふ靈^夢と^りあり^てい

一遍上人^ハ後^ウ多^院淨^ウ建^治二^年丙^子二^月廿^二日

詣^リ後^野澄^法殿^三七^日念^佛と^り庇^生利^益の^法縁

と^り著^ク弘^通せん^とい^のり^ゆひ^一と^り後^現衣^冠

心^ノ上^人小^對一^と七^言四^句の^文を^授化^一と^り

謂^ハ六^字名^号一遍^法十^專依^心一遍^跡萬^行雜^念

一遍^證人^中上^々妙^好華^干時^上人^此以^示現^小修^く

六十万人数定、往生のれを多く。老若男女小配与（六）時不（多）小誦念仏を後とす。大鼓とありし。弥陀の
多号と唱て。法を弘通し。後々（已上）阿向答

證誠殿（ハ） 旧記云熊野本宮證誠殿号證誠大菩
隆或号泉津御子称地主推現（ハ） 神社考云熊野

推現證誠殿本地阿弥陀（ハ） 三熊野ハ舟橋小記と
糸うひも之乃（ハ） 糸うひも満（ハ）つづけり。之乃

舟橋小記と

▲乃ふ立出る様衣紀の関守がさのうら

紀の関ハ 宗祇名所集云（カウヤ）野とららとの中島
記、関ありといふ。又（カウヤ）野との後と云ふ。さし

南、紀云紀の関乃跡ハ此の如く云ふ。又不（ハ）疑或、記云名
草、於山ハ、庄中為村の小六七町（ハ）雄（ハ）ふあり。さし

也。さし藻塩（ハ）小のうら。それハ紀、国雄山、関守が
持（ハ）らり。さし（ハ）らりといふ。さし（ハ）らりといふ。さし（ハ）らり

袖中抄云、さし（ハ）らりといふ。考、紀伊國、此土記云、さし（ハ）らりといふ。
とむ。さし（ハ）らりといふ。それハ紀伊國雄山の関守が持（ハ）らり
く。さし（ハ）らりといふ。それハ紀伊國雄山の関守が持（ハ）らり
さし（ハ）らりといふ。さし（ハ）らりといふ。さし（ハ）らりといふ。さし（ハ）らり

詞林采葉云爰

抄本、人曆天平勝宝七年春二月於（ハ）尤大臣橘諸兄
卿之東家宴饗於諸卿大夫等。于時主人大臣問、人
九、曰古歌云

「あさひのひまの雲もうららけのうららけを時なくとえ急るま
曰安佐母余比紀其情奈何人丸答曰式部卿石川
説曰古俗語傳朝炊食謂之阿佐母与比紀薪也以
燎之炊飯因之紀伊国発語以為阿佐毛与比耳
昔河内志小治の男いし志治と妻あり或夜男の妻
よ此、あせとふみくま、口を唇と月以の髪りくらむと
つた、ゆのいを所へまゆる。是と秋見ふ志治とてま
と垂りり、まよふてこれ、花の上小弓有て女いり方な
一、男あひささ此、弓やよまを巻一、少小月日へまら
ゆるを成くある(花をぬ、男の志をまひりよ紀伊の雄
ひくまをまへく又女小成て、うきまをまへくうせぬ、後小
す、波心の雲さう持まらうとて、
万葉記に抄之あさひのひまと云ふ、あまの炊朝飯をく
く天せり、後志是は是の必一も版せり、くまはあま
さり、まやのひまはと云、河ふりて、物飯のうららけひま
せり成一、只寒天小いのも燧をきとまらまらうとて、大
切なりなりふ、燎火と物よのいし小まをまらうとて、れい、あまも
うひまはつ、くらむ、あまのまをまらうとて、まをまらう
つ、まをまらうとて、まをまらうとて、まをまらうとて、

▲死の都 田村小治

▲神をつつね踵を継ぐ 踵の俗小、まびととて

説文曰踵追也一曰往来貌也 廣韻曰足後也

王元長曲水詩序曰中鉉繼踵乎周南

念佛之昧の乃場小 念佛三昧の當り小はと之昧の

若界小化と 道場者天台大師觀經疏曰得道之

場名曰道場矣 止観曰道場即清浄境界也治五

住據顯實相米亦是定惠用莊嚴法身矣 弘斐曰

世以治穀及以祭所俱名曰場今依淨境以治五住

故曰道場矣

▲名小あふの江に小流と。洛陽の野宮倉後河隅田川一夏

の内ふよりの遊り柳ふはと

▲蓮葉の溜り小あまぬりて ゆるあせむくあさむく

右今集及之部僧正遍昭云。河を去るちよの志

んくよめりしき。 兼雅抄云蓮葉の溜り小あまぬ清浄

たるらともらるる。あせむくあさむく。あさむく

とそる(かれとつり。あさむく)の流とさき

法華曰不染世間法如蓮花在水 矣 周茂叔愛蓮

説云蓮之出淤泥而不染濯清漣而不妖中通外直

不蔓不枝香遠益清亭亭淨植 上下畧

▲上人 遊り柳ふはと

▲六字名号一遍法十界依正一遍終万行雜念一遍證人中上々

妙好矣

六字といふは河津陀佛と。名号といふ即ち念仏也。此名

号一遍智といふは万善万法の切法納め法なるたふかく

十界の十界獄餓鬼乃至佛界之依し其十界の
と居るありて云ふ心と十界の中乃心ありてせしむる
らく此のありて居たりと云ふ。十界小名依託心
るを一遍唱えし。此名号ふよりて。十界小名依託心
より離念一遍澄といひあくの四徳居こり名号る
まの修小一遍よく得たりと云ふ。一遍澄といひて。澄はさ
とるこしむし。人中と々妙好花といひ念仏の修人の上々の
人。故小分陀利華小喻たり。 觀經曰念佛者當知
此人是人中芬陀利華矣。 善導云言分陀利者名
人中好花亦名希有花亦名人中之上々花亦名
人中妙好花若念佛者即是人中好人。人中妙好人
中上々人。人中希有人。人中最勝人也矣。

▲光明遍照十方世界 忠度よほ

▲唱ふも我もなるうらうらむ心もなる

是の一遍上人の中なる。ありて多しうらうらむ

▲至誠心深心迴向發願の體の多

是と淨土の三心と云ふ。發願の體とつけらる。自然居
士小淨也。 觀經曰若有衆生願生彼國者發三種
心即便往生一者至誠心二者深心三者迴向發願
心具三心者必生彼國矣。 疏曰經云一者至誠心
至者真誠者實欲明一切衆生身口意業所修解行
必須真實心中作矣。 又曰言深心者即是深信之

心也矣 又曰言廻向發願心者過去及以今生身口
意業所修世出世善根及隨喜他一切九聖身口意業
所修世出世善根以泐自他所修善根悉皆真實深
信心中廻向願生彼國故名廻向發願心也 矣
一善善修之然阿上人之心と具せざる者も如く安
定れまといふべし故實小うしてしめく三心と具と
るこゝく 又教房云とんまうひて具とらぬの
かたひて 一教起法文云と心に於て一の心
ハ皆安んじしるも安んじしるも安んじしるも
うらよ絶い也

千声一声救りのく 往生礼讚云称名号下至十声

一声等定得往生乃至一念益有疑心矣

後後飛 六の乃奇めうりしてをぬんす声一声捨ぬらうひ小 湛空上人

夕陽を小うらひとわ小うげり夕月の

夕陽ハ 余雅曰山東曰朝陽山西曰夕陽矣

纂要曰日己曰朝陽日暮曰夕陽矣 和云毛侍の

うくと考方小山のをを斥て又。夕月夕月と

陽夕陽たえぬを斥て不用之 此うけらふはのうけら

あふ心と月の教りぬ。夕月への古本よはと

五障乃を云 梅枝小波を

三世安樂の國小とるせんといふ

釈尊二世安んじ。弥陀の浄土と母不廻しつり。冥慶よ
法を。法花云現世安穩後生善処矣

▲蓮系の臺乃級ぞやしつらん

平等覚経曰於七宝水池蓮華中化生矣 五會讚
一々池中花臺滿花々惣是往生人矣

▲源安乃 利益無量罪 當麻小波と

▲又ハ餘経の後乃世も弥陀一教し支那と

末の世小成てハ一切の法経皆つぎとつらん。されども時ハ

弥陀如来の一教ハ世小成しつらん。此れと利益あり

并量壽経曰當来之世経道滅尽我以慈悲哀愍特

留此経止住百歳矣

▲八万諸を教皆是弥陀佛とらん

是ハ阿字十方三世佛。弥字一切諸菩薩。陀字八萬諸

聖教皆是弥陀佛とらん。文小よらん。八万諸を教と

ハ世も一代の流教とらん。そのおへひらとらん。凡皆

是ハ弥陀佛とらん。或曰此文の多。了卷の

二藏義小平等是純小ありと。今此経とらん。彼

文小あり。又冥惠の權邪興正集小秘密神呪經

小ありと。今此の經とらん。神呪經と歌せる經も是

なりと。如法經文小よらん。今此の經とらん。浄土三

部經の取意とらん。此の經とらん。此の經とらん。

より。 惠心云唱阿弥陀三字即唱一万三百二十

四卷一切聖教矣

▲誓願寺と云ふる額をのけ上人乃以多誦少く六字の表号
うしく治りりく 當寺六字の額一丁遍上人の号也。當

寺再貞大施主大相国北御方佐々木京極女為二世
安樂とあり額の大是寺瑞菴空心親王の号也。

額のうらむといふもかろくもく 徒然草云門は額かろく
うらむといふようぬく島解由小治二品後門の家うらむ

のほひといふもく。 徒云大流の上小実教の傳ふ方の
やう小家のうらむと云うけり。 子家切實小教うら

備き。よめぬまかみし。 歌の字のひといふし
よあり。人小對とるふ其家とらて則に某とありうとく

殿門ふらとて速小其名とありのま小周まりとて
或云昔の多人家とからるま。 禁中三十六殿九重の門

より外ふら。 社といふ伊勢岩清水をし天子同休の
社寺の七十二寺。 天子淨新願所の外いふぬるし終

よ一條流の時。 東三条魚家と小治と法真院と云流
号と淨光とく額とけりま。 攝家小額とく

る。 額うけぬ家へ下馬も。 今以勅家とく終の
門ふらひるま。 終

▲あの石塔は和泉武部の墓と云はつるふ

誓願寺南隣誠心院の庭小和泉武部の墓及影像也。

武部系名の東北小沼を、徳の前後級起小沼と云り

▲我も若く此寺小値遇のあまのこころの

武部教寺小菴居（カウキキ）一尼小あり。專意（センイ）と名づく。則（ナ）此

寺よく祀せり。値遇の盛久小沼を

▲善も秘やうまじし法つらと乃

（新）下つるふ小秋とてうまじし法つらと乃のふさへ海と中

和泉武部といふんとて此、分とせり

▲石の火乃さるりの拍崎小沼を、異香薰（イカウケン）トの當麻小沼を

▲二十五の菩薩を、辰の湯法よの紫を云うまじく

十往生經曰若、有衆生念阿弥陀佛願往生者彼佛

即遣（シキ）二十五菩薩擁護行者（シキト）兵（ヒキ）選（セン）決（ケツ）疑（ギ）抄云二

十五菩薩觀世音大勢至藥王藥上普賢法自在王

師子吼陀羅尼虚空藏德藏宝藏金藏金剛藏光明

王山海惠花嚴王珠寶王月光王日照王三昧王定

自在王大自在王白鳥王大威徳王每邊身（巳上）

（傍）紫のまのりて女あまのりぬの姿待見て〜る

▲神當寺誓願寺とリをり大智入皇の所願

神の字義いふ砂小沼と誓願寺いふ小記と

帝王編年記云三十九代天智天皇諱葛城近江帝

舒明天皇第一皇祖母皇極天皇也於岡本宮攝政

五年御宇十年自壬戌至辛未岡本宮五年（大和国高市郡）

大津宮五年（近江国滋賀郡）元年佛滅後一千六百九年當

唐高宗龍翔二年也十年十二月三日天皇崩御云
或曰天皇駕馬幸山階御更每還御永交山林不知
崩取以御沓落所為其陵矣

▲所尊尊い慈悲万行の大菩薩云日乃明神の御化と云

本尊者 秘藏記云我本来自性清淨心於世間出

世間最勝最尊故曰本尊矣 慈悲万行い云日の菩

薩号く云日竜神小龍と菩薩の字味い自然居士流

世小ま日之作と云日と云日とい佛師の名も樂の假

面小もま日が作余多あり 或云替文會替主勲

い河内国春日部邑人兄才た小仏作くくそとま

日の作しと云又一説小或人一生仏を作り死する時

と成てま日ふ小龍をくく世小まをま日の化と云

又名の作と云も此人の作く 旧記云鞍作鳥俗

云鳥佛師司馬達等之孫飛驒国鞍作手為名之子

也一日手為名入深山求良木見一人神女遂愛之

媿而生兒其頭似鳥故称鳥其工妙絶最神工也善

作佛及堂聖德太子寵之而共議工法称飛驒工匠

飛驒乃生国也元興寺丈六釈迦像法隆寺十六羅

漢土佛其外此人之作多矣

▲邪といひ作といひ只是水波の海なり

誓願寺の如多と云日の内作と云小舟くわくつと

▲たれい毎日一交いあ方海と小かといひ流して

釈書六十九小釈、ハニ能くし人、誓願寺の如きと
多供養せしむ小、地蔵菩薩小いさなり。極楽世界
以此、如来を祀りしむる。此、ハニ小像くくしむる也
▲素直引揚イシのちいをわくし、かちしむる也

弥陀の四十八釈の内第十九の形、ハニ及流状前の形

▲竺歌遠小字也、流雲の上なるを、ハニ及来途と、ハニ流日のお

是、ハニ大に定基、ハニ道寂照が待也、ハニ実盛小流也

▲昔在靈山の法名、ハニ法花一仏、今西方の弥勒如来、慈眼視

流生ゆりりく、娑婆示現觀世音、三世利益同一體

或曰古徳云昔在靈山名法花、今在西方在量壽緣

發示現觀世音、大悲一鉢利衆生、ハニ此文の名盛久小流也

私云、ハニ實小慈眼視衆生といは法花普門品の文也、ハニ娑婆

示現觀世音といふ、ハニ此文を定小出せり

▲若我成佛のちりりく、ハニ世の人乃

在量壽緣小設我得佛といふを、善淨大師ハ若

我成佛といふ、ハニ此、ハニ後猶若と釈し、ハニ又、ハニ宝

積經小、ハニ若我得佛といふ、ハニ此文の心、ハニ抑小流也

▲我力小、ハニ此、ハニ我力といふ、ハニ自力化力の事

遊り抑小流也

▲さるれ、ハニ佛の、ハニ彼、ハニ東、ハニ居士、ハニ樂と、ハニ抑、ハニ小、ハニ實、ハニ流

▲十惡八邪の、ハニひの、ハニも、ハニを、ハニらん

十惡ハ東、ハニ居士、ハニ小流也、ハニ八邪者、ハニ毘婆娑論曰、ハニ英

邪見二思惟三邪語四邪業五邪命六邪方便七邪
念八邪定 兵 下掛小八十魚万粒とうふく。万の定
穀小也。穀の多さうとめれ

▲去如の月いふ地。定とさるるをうらひの定也。唯心の淨土の
▲振崎小波と

▲独於佛の心多を尋えんかのくゆり法乃庭人
是の古方歎あつた。実を言ふもかより

▲奇瑞 奇異也亦非常詞。瑞とい説文曰嘉祥符應曰
瑞 兵 前漢書董仲舒傳曰天瑞應誠而至 兵

杜若

伊勢物語云昔男ありたり。その男をとえり
りといおふといかへく。氣よいゆり。ありま乃
ういよとていひいふりてあふしてあふりたり。あ
よとてとすりいひりあふりていひりたり。あ
あまの人もあつていひりいひり。と海も八橋
と云所ふいひり。とを八橋といひり。いひり。あめ
はのうりてあまの橋を八つとせらるよありてあ
八橋といひり。そのはのやりの本のたよあり
わくくもあふいひり。そのはのうりてあふり
あり。うくあふり。それをあふりてあふり人のあふり。

杜若

うきふくしとまふ文字と句のくふふて。諸
のらとく火とつひらきいよめる

「唐衣さつるまきは甚あまのりぐらる諸の
くふりたれい。若人うん版のよふ洞をくして
びよりりつと云

從四位上九近衛權中將兼美濃守在原業平朝臣
平城天皇御子三品彈正尹阿保親王第五男也故
号在五中將行平弟也母植武第八皇女伊登内親
王也童名云曼多羅九天長二年八月七日誕生天
長三年賜在原氏九慶元年正月十五日任九近衛
中將業平躰白閑麗放從不拘略也才学善作和歌
于時九慶四年五月二十八日辛巳卒歳五十六

在原氏系圖 三代実録
伊物諸抄 文畧

梶嶋曉筆云業平子息德春父

の送河よにせ東山を田の奥よかろり納て廟をつ
く同九月十三日宇治中納言藤原朝雅の孫也信
の時和泉公大老那と通しれ一よ彼中納言と
衣と忌一黒るのふさうはくま一とふのり供奉
の者十人年おほよまうく及らまうり朝雅の
まのこくくまうていふまういんしあはくゆらあ
まういんれんい中納言時孝ふはまふしを信と
てうさけをやうよまぬ。若平中納言をせゆと信
実モレふは彼中納言あふとて信をよ下らうりこゆ

うれり色た。音^{コトシレ}信^シりり^とを^而新^メの^なし。そ^して^しく^海
らん^とせ^しり^り。一^夜。夢^よ業^年ま^まり^りせ^えと^そ
「い^いち^く邪^代の^もも^も忘^しぬ^る者^{あり}の^我が^この^心
其^後多^受ぬ^れり^り。一^くと^り人^皆彼^中を^いは^じ
吉^的神^{とい}ひ^りれ^ど。後^七条^中宮^の御^受業^年
足^らず^れ。系^統の^家骨^と和^泉。玉^行基^建立^の
地^郡の^生た^る。而^も細^をと^りて^は。是^もふ^りり^部
か^浦平^之名^小作^とか^の骨^と和^泉。玉^一か^りり^れ
多^志の^地と^る。ま^まり^り。一^よ。大^志の^大神^の社^に
の^成ま^ふ。と^りり^り。一^はい^りり^り。や^りり^り。一^とり^り
其^の骨^と細^の寺^とを^立。出^泉寺^とを^立。名^付り^りり^り。
今^の淺^寺。是^こ。城^と中^の御^城。と^りり^り。又^標案^と
大^和。志^りり^り。一^時。中^の御^の骨^とを^立。ふ^りり^り。
大^和。志^下。部^小。細^のと^りり^り。一^とり^り。今^の
の^在原^寺。是^こ。一^後。延^表の^に。在^原寺^の。枝^分
虫^食の^分。あり^り。
一^在原^中。の^里の^乃。と^りり^り。一^つけ^宿。の^あり^り。
是^もふ^りり^り。大^曆。元^年。七^月。十^一日^に。た^りり^り。清^原。光^元。任^に。
よ^りり^り。中^將の^骨と^りり^り。一^とり^り。今^の大^和の^内
内^の神^を。又^池田^社。と^りり^り。一^とり^り。又^業年^今。乃^り
多^安。城^とり^り。一^とり^り。一^とり^り。一^とり^り。一^とり^り。
と^りり^り。一^とり^り。一^とり^り。一^とり^り。一^とり^り。

上

下

て流するはゆり中流清めが封せしよりゆり
して尖小もやけど久しくゆりれば世の末よ
りて甲斐多き一とせの尖小流少き鴨長明
の云り云云 玉傳源秘抄
同く

▲是の法正一見の流すくい

此流のゆきの流があつて流の字は田村小流と
都の字はさかづき流湯の野宮行脚の屋流小流と

▲同ト流霞の尖流尾張之河正よと云ふりり

流霞流枕をくまのあ色の流神とさうさう流
おらつりぬきとさうと。尖流の班女小流と。

尾張の系流小流と

三河国ハ旧事本紀云参河国造志賀高穴穗朝以
物部連祖出雲色大臣命五世孫知波夜命定賜国
造矣 大和本紀云三河国ハ此尖小有三河二小男
河二よの豊河とよの尖作河是也 因此三河号三
河国又男河とい河とよの尖作河ハ女流男流一処ハ
不往而尖小帯と流也 其流よりあつて男流
河と云 此流世傳ハ白流の流と云 尖小
豊河とい昔此所ハ長者ゆり 此河と尖流居る
人屋流るゆ井里と 彼民家豊小流あり尖小そ
流を号尖流又尖作河とい日本武尊東夷征討
の時此所より多く尖と地はゆい一尖小其処と

矢作九のひ。河の名も舟舳ひーし夫畧

▲又乞らるは色不杜若の今を盛し及てい

杜若トシカのやふやうがと云ふのこ。葉の生ヒツキヤ薑カウキヤに似く

度し。藪ヤブの内ウチ法ホウ不フ生シとも。楚詞ソコよあくうり。杜若トシカ

とらとつりこと云のあやうりこ世小うことらと

と云の燕子キヤウ花ハナ成ナリ一イツ。杜若トシカの根ネを。燕子キヤウ花ハナハ之

四月シゲツキよ花ハナ開ヒラく。見福列府志ミフツリフシ水ミヅ系ケイこ。又マタ陸地リキ不フ

もくも。法ホウ業ヤウ色シキ小コく。又マタ時トキ花ハナ開ヒラく。又マタ白シロ

花ハナあり

▲元法ゲンホウの融ユウ小コ流リウを。多タ木キ少シウなり。ハ江カヘ不フ流リウを

岷江ミンカウ入楚ニク云常陸トコ玉タマ小コうウをウ列レツりリとトうウかカ流リウと云。

此コノ花ハナ咲サキ時トキ。りリかカ多タ鳴ナリと云

万葉仙マンヤクセン是コノ花ハナをウかカ流リウと云。うウとトうウかカ流リウと云。うウかカ流リウの

鳴ナリ時トキ不フさサけケけケりリかカ流リウと云

八雲ヤクモ流リウ抄セウ云クかカ流リウと云。うウかカ流リウと云。うウかカ流リウと云

▲今イマふくフクハ江カヘ。面オモ白シロハ之コノ情ナリ。流リウ石イシハ安達ヤスダ系ケイ。名ナ不フかカハ

江カヘ不フ流リウを

▲色イロもモいイとトうウかカ流リウと云。うウかカ流リウと云。うウかカ流リウと云

とじトうウかカ流リウと云。うウかカ流リウと云。うウかカ流リウと云

ゆユうウのノ縁ヘリのノ字ジ。あアらラ業ヤウよヨいイゆユうウとトうウかカ流リウと云

古コ名ナ多タ一イツ。又マタ物モノ名ナよヨ流リウと云

拾玉。世宗の多ふをむく杜るやうの比も多う。一と云ふ

伊勢物語よし。下巻の中好色のるゝと云ふのめ
り。女の貞美とあり。又奇の贈答の奇妙
なるをよと云へり。合巻石二十ふ戻り。此相傳
と伊勢物語と名付りふ。古来の流りあり。あり。
いりせの相傳と云ふ中畧一と。伊勢物語と
名づく。或ハ此相傳の内。伊勢の傳乃伎の伝ふ業
多。故宮少あるや一の不多。物語一部の云伊
勢の傳乃伎の伝ふとあり。依と伊勢物語と
名づく。或ハ伊勢の二字ハ陰陽也。又合巻
此ハ不用と云ふ。此書ハ古流の流りて高流
といふ。

定家に伊勢物語奥書云抑伊勢物語根源古人説
々不同或云在原中将自記云云又云伊勢筆作也
似彼家集文躰是故号伊勢物語以此兩説案之更
難決之伊勢家集其端文躰偏以同之是又見先達
舊記庶幾其躰歟兩不知之加之此物語名字非彼
筆者何称伊勢乎或説云為將使下向伊勢仍有此
名其説又難信 文畧

宗祇注云非彼筆者何称伊勢哉とあるハ黄門の
も伊勢が筆也と云ふと相傳の歌号と云ふ
るくと云ふと云ふハ高流の義也。伊勢が筆

仇小付ても。七条石宮(業平の一期のふ)と倍
 せむらふを記せりと定ると。此うらよ業平
 の自記乃河もお交る。不倫作り相済しふる下と
 實と八橋つひりあり河のくもくうまは橋を
 かつ後せらあり 伊勢相済し河か—お進せり
 よふ記と。八橋い墨海の家よりちりふの家へ
 越の中より。中津川中川の方八橋とを村の
 中ふりり。あより出流々小川ふ後—より
 瀬谷杜玄八橋八ふい不^限あ^河延^横たるふ。
 あらうこらうこ掛ると云成—。相の粘と八
 と限—と云のこ—
 月屋と相手といは方よりあ^海あ^ひ延^横小
 あ^のの^のと^いか^し〜

東関^記行えり〜と河玉八橋の〜とらん
 是の在京業平杜若の音よりみ〜とらん。皆人
 うまのあ^のよふ河を〜とらん。ありひあ^ら
 れ〜そのあ^らと〜した。かのま〜あ^ら〜と
 相いた〜と。橋のそであなくんあり

「花田」下落—洞の形入と橋あ^の方と相い
 丙辰^紀の河玉八橋の杜若の名は〜とらん。在
 中^のの音よ〜かられる。今墨海より比^相經
 鮎よ〜とらん。水の方一里半よ。〜とらん

の八橋ことそそ下の人、遠く橋とこゝろあり
ゆる。久安田とあそく今うの杜もあか〜
う〜寐とと何ふ八橋と云所と見せしむるも
昔小いあ〜と成ゆる〜。橋も只一ツとある。
杜も多うる所と實〜うた。あ〜りのまも
皆拵らるはむと〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜

ある人杜若と云ぬ文字と句のよふと〜と〜と〜と
よぬと〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

ある人といふ業平昔事らうりの月夜の花と。おほ
よなと〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
は人々とし 急取抄云女と〜と〜と〜と〜と

貞観七年己酉九月九日ふたつりたりふつと〜と〜と
唐衣と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

古今集雅抄云唐衣と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
よ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
の縁乃洞と。秀句多と。秀の帯ふ短と。是の紙
紙の折句と。あをせ〜と〜と〜と〜と〜と
でいふ叶ると。苗と。品抄ありれ深〜と〜と

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若 冠者 社若

社若

社若

以錦為之矣

りる衣いろりとのと小りさめりあり
縹シロカとさぬこ。青、赤、色の唐衣の色ありぬ人の
髪キよりみこ。された若かり女メ婦メのまゝと唐衣と
まらこ。枕マ子メおのりいひのさるるうふらぞ
めくさぬいりりさぬいりりさるる

透額スキヒタの冠カと云

伊物集註云十六歳より内ハ

と云いひいりりて。額スキヒタの透スキヒタり冠カと用申さるる
或云額スキヒタ小六七分の穴あり。少年ハ血チ乳ニ甚シ交カれ小
穴アナと云るるく尺シくさるるく 東トウ海カイ陸リク軍クン云ク志シ

義ヨシ之ノのゆ子コ園エン院イン大ダイ將シヤウ朝テウ光クワウとトハハツツミミトトウウシ
世セのノおノかカえエあアくク。ゆユらラひヒのノ終シユウしシのノゆユふフさサ
らラとトぬヌくクぬヌひヒてテ中ナカ畧リヤク冠カウのノすスまマとト叙シヨもモ。世セ般パンのノあアひ
ようユウゆユくクるルことコトさサるル

皇子の后乃降衣ミコノノノノと云

うウらラくク。清和帝の后ミコノノノ。号ナ二条后ニジョノノ。贈太政大臣正
一位イ。后ノ原朝臣ノ長良女ナガノノ也ナリ。陽成院ヨウテイイン母ハハ也ナリ。天安二年
十一月トキ。清和九歳シウ少シウくク而シテ位イ一ニ降カふル。次ツギのノ多タ貞テイ親シン
元年トキ十一月トキ廿日ニニチ。皇子十八歳シウ少シウくクふフ節セツのノ舞マヒ妓キ
たり。同八年トキ小女御コメノノ小シるルりリ入イ内ナイ。つツまマと
帝ミカド小シつツふフまマつツくクかりカりリ。時トキ。業ノ多タとトひヒと
ゆユくクすスくク。延長十年トキ二月ニゲツ廿四日ニニシユチニチ。小シ豊トウとト。年トシ六十九

又此冠コウのノ業ノ年トシのノ豊トウのノ明メイのノ小シ節セツのノ舞マヒのノ冠カウと云

豊の明の節會ふふ節の音を奏せしこと。み節の
女の舞あり。ゆくと業平み節をまゝつたり
公事根源云豊明節會ハ十一月中辰日。是日今
年の編と律ふまもせはひて。今日あまをさじ
ゆ〜くはトあもゆふあふ。節會はつらと〜
但諸節會とともあつらと云々あり。

日本紀云樂府宴會と云

塵添チニ壺デニ囊抄云本朝月令曰五節儻者清御原天皇
所制也シヨ天皇吉野宮小御座時日暮琴と律しゆふ
よ。ををり忽よ起〜神女髻ウツ髻ホツ〜て應曲舞

舉袖テ五〜いあま〜あふ此云五節ト云

伊呂波字類抄云五節舞文徳天皇御宇奈衡三年
丙子始之寛平御時舞姫公御可進之由始被宣下

矣 古今事考元撰云或流云天智の御宇震旦チン
崑崙コンロン山の玉をふつ後さる。その玉暗クラモと照ヒラと〜の玉
のえり十ふあシヨの車ふあ。その又高タカふらり松か
人多く庭ふ廻るの袖を翻ヒラと〜み交と。但天
暗と折と。彼玉をふ〜てその形をゆ後と云
み此の舞各号神也。あふ名ナみ節ト云々
右後と不同と

續後撰

。天し女玉ともをひくまのこのまののびる歌小名女上天皇

誠ハ我ハ杜若の精勿り極色〜若の宿の杜若と云々

一も女のうらみはふり僧のまゝなり

後撰集夏部云辰原のうらみ乃余ゆふは

男人のよふらつりゆふなり。又の年杜若ゆふ

遊ユ一カ良峯コシノガタ義方

いひ初一若の若乃杜若色ゆふを歌ふなり

若の心ゆふい初一若も今いこそ人のゆふ

うつりうつりゆふ。此杜若の色ゆふを歌ふと

なるし。

雲玉集云と一うらみこそ人辰原のうらみなり

うらみ人のよみとらりゆふゆふゆふゆふ

一い初一若の若乃杜若一

男乃愛よ女のうらみ

「紫の色小おどいと色と戻ゆとつる若の若を

杜若の精乃若。是うらみ女とらりゆふゆふ

今葉 雲玉集小若の若の杜若ゆふゆふゆふ

うらみと。又小杜若の精ゆふ成く紫の色ゆふ

と返若志なり。ゆふと。此ゆふは昔の若の杜

若ゆふと。又後撰集及雲玉集小上乃ゆ

ふゆふと。又後撰集及雲玉集小上乃ゆ

ふゆふと。又後撰集及雲玉集小上乃ゆ

ふゆふと。又後撰集及雲玉集小上乃ゆ

ふゆふと。又後撰集及雲玉集小上乃ゆ

又業平の極樂の歌舞の菩薩の現化の事
 玉和歌の言の事とも皆法力ホウリキ法ホウホフの如く
 鴉カ鷺サ記キの中におい極樂の歌舞の菩薩の如く
 又観音の化力の内よひたりふらひの如く
 りりし外よひたりふらひの如く
 下畧 歌舞の菩薩の法を修し
 十往生の遺二十五菩薩念仏の行者を擁護ヨウゴ
 するを修し二十の如く
 誓願寺の如く

止観曰風音水音我等言諸鳥鳴声何者不二諦性
 性声是曰法身說法法 玄義云蝦蟇上荷葉唱
 正覚 蜩蟬鳴 黃樹轉法輪法

音男 雲林の如く

假小虎生と業平の本地キョクノ寂光の如く普く沙
 利生の如く 阿古根浦口傳え月やりの如く
 秀の如く 法性寂光之地と云く 常波の如く
 虎生と利差の如く 其の如く伊奘諾の如く
 小玉を修り 業平と化して男女の如く
 音として虎生の縁と結ぶ如く
 玉傳縁秘如く同秀の如く 月やりの如く

まの。我の法力の如來の變化し。衆生他変の乃ふ
此、必よあまらるよ。雖化衆生のあやさの昔本是
の月おのりぬや。人し流る。まや昔のまのん
とい。本是のま寂え浄土とあて。うしとゆ
んじらゆとあてと本是のまとあてらうし
らと。あ、あ一の本のあやととい。只我力のま
本是の薩埵うらうしとあてらうし

寂えハ耶耶と流る。作らま妙と流る

作れ相流というる人のゆゆよらうとあひのまの
あふ心志のひておらふ流るの始のまら流るは

伊勢初流は業年とまのまのあひ流るは
一せ好まふめ流るしやうとあてらうしとあてらうし
ハ善始を終一心一念の本はととと流るは

けらり 莊子則陽篇曰無終無始無幾無時矣
伊和
。あふ心志のひておらふ流るし人の心の奥まらうし

昔芳らぬらうらうてらうの系ま日の里よあらうし
しとらうらうらうらう

相流は端の泪し。うぬらうらうい。元服弱冠
初位 初冠つらまもらうぬらうらうとあてらうし

愚見抄云元服と叙爵とあは共小月也。うぬい
初こ。うらうらうの爵し。位のうらうらうとあてらうし

爵とり。業年初叙爵とらうらうとあてらうし

宗祇抄云今ハ元服の儀を月日云元服ハ男の
五男の始信神の定よりあり云云

元服ハ 前漢書昭帝記曰元鳳四年春正月丁亥

如帝加元服注 如淳曰元服謂初冠加上服也師

古曰如淳以為元服之服此說非也元首之所著故

曰元服兵 其下汲黯傳序曰上正元服冕是知謂

冠為元服兵

ありしと云くといふ所のよし。多良小業

多の初めありしと云くよし。業平ハ平家帝

の侍孫阿保親王の子なり是ハ儀の額カを

ありし。 ね云ありしと云はるる。

初め所のよしと云くよし。

奉納菅廟詩歌之序云 藤原老系 此秋文月ありし。

又この有り初め所の地を治ふとき

うもふよりありといふ。忌見抄云鷹狩ふとき

道遠院禿空云候物不行りし。鷹狩のとき

衣と云初め付くころは只當時のよしあり

し。又鷹衣ハ鷹狩不限りしと云くもさす

初めし。いよりありといふとき。律代ハ不

行ハと云業平元服しと云良ハのよしありし

けと云るよしありし。元服の儀ハ

多ふりといふよしありし。多良の系ハ玉葛ハなり

多ふりといふよしありし。

若き。のりま日乃里小我やういなるやとくこ人のるい

仁明天皇の御宇かこよ

帝王編年記云五十四代仁明天皇諱正良差我天皇第二皇子母曰太皇太后橘嘉智子内舍人贈太政大臣正一位清友女也弘仁元年庚寅誕生同十四年癸卯四月十八日辛丑立為皇太子。天長十年癸巳二月廿八日し西受禪癸巳即位於大極殿御年九。御宇十七年都平安宮嘉祥三年庚午三月十九日落飾同廿一日崩于清凉殿御年四十一同廿四日奉葬山城国紀伊郡深草山陵号仁明天皇

深草帝

家貴と云 藤原のまといともか

いん穴賢うり又忍まこくち河といくの家こりいりいあちりいこ畏らこ

指玉

りありの浮力のひをりりいこいもいこい

大内いのみまあまやはせの 大内いの内書とま

まうすいのかの字津てとるあるこ。生い田村小津と

孟津抄云東橋花巻よ以中ねあふ

徳小大内いいあつて入いりるせぬいひの月

帝王系考注云宇多院山陵在大内山仁和寺西。李部王記云天曆二年正月十日大内山火起不滅矣又云承平三年四月六日天子放若狭国取献之

雉ニ於大内山ニ矣 今某大内山仁和名不
るれ九家小内裏のふふ月より日本紀小
内裏とちとちかうらとよあり源朝政も
大内も後の武士少く三位とのそと一ふふ
大内山のふさりてよあり

後拾。今又後拾てある大内山のまのあけかの後拾

▲まの日の祭の勅使とて

冷泉流伊勢御伊注云兼和十巳年三月十二日
業平まの日の祭の使少りてうらとよあり候初カキソクの候
こ。是ハ五位の換北遠使の使と。業平ハ親王
のみられハ此使をととくふあふ福を。時のそら
つとて候初カキソクの使よりとて

旧記云まの日の祭ハ五十六代清和帝貞観元年十月
九日小祭り。隆時リウジ祭ハ九十一代伏見院正徳三年二
月九日小祭りとて。私云春日祭ハ毎年十一月隆
時リウジの祭ハ二月也。此、徳よ休むのもめつとて候
ハお遠敷。但右の冷泉流伊勢御伊注ハ三月とて
是より

江次弟云春日祭、勅使、宇治関白十二歳、時寛弘元
年二月、勅使、大畧、盃ニ也、舞人十人、陪從バクシ四位八人、
五位六人、五位中将又八人矣

▲殿上少くのエ服のふ當時タウシも、例稀タラシなる小

村若

肖セウ同トウ云ク古コ流リウ云ク仁ニ明メイ天テン皇クワン兼ケン和ワ七シチ年ネン業ゲツ多タ十ジュウ六ロク歳サイ

くくえ服スエ 冷泉流伊物注云業多ナ十ジュウ六ロク

東寺僧正真雅シカガの才サイみよそ有アルるをヲ十六の歳兼ケン

私シ十ジュウ日ニチ年ネン三月十一日仁明天皇の円喜エンキくえ振フす

るルこコ此コノ時トキ業ゲツ多タの五ゴ位イ云ク官クワン少シウくクたタ近キンをヲまマとトすス

今案當時イマノトキもモ依ヨるルよヨりリとト依ヨらルいイ

業ゲツ多タ此コノ時トキ兼ケン友ユウとトいイひヒるル年ネンのノ時トキをヲさサたタ親シン主シュのノ

みミらラるルあアふフ殿テンとトいイくクえエ振フあるルこコ依ヨくクるルのノ依ヨ

りリんンことト依ヨらル成ナるル一イチ

流リウはハ世セ中チュウの一イチ交カウいイ景ケイ一イチ交カウいイかカらラりリあるル

莊子天運篇曰ク四時迭起シヨクニ万物循生マンブツジュンセイ一盛一衰イツセイイツサイ文武

暮也クモリ矣ナリ 前漢韓安國傳曰ク夫盛之有衰ソノ猶朝之必

反ヘン也ナリ 且カ東トウの方ホウふフりリ景ケイのノ名ナをヲかりリのノ海カイつツ

よヨとト依ヨらルとトいイくク 依ヨらルいイとトいイくク東トウの方ホウをヲかりリ

けケらラるルいイとト依ヨらルとトいイくクのノ方ホウのノ海カイをヲかりリ

又マタ名ナをヲかりリのノ海カイつツとトいイくクとトいイくクとトいイくク

のノ方ホウ乃ノ海カイをヲかりリとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくク

海カイつツいイのノ海カイとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくク

とトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくク

とトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくク

とトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくク

とトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくク

とトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくクとトいイくク

杜若

やと所の水乃危おろくびりし人ふり給くよ
名とり人とりと

都本及難養其外古注小業字書喜よ下ア
しお徳の地と於くぬ色のおやう。あつら
多うらりれい。大やけのせいじよ。つくとやめ
させ東トカシのキコ整キコ形キコと東トカシと他トカシの。室キコ
いりしとくしとく。他トカシ。景雅世云業字伊勢の
所をとおかり。又二条の所く密通ミツツウとるふ。
せうこのくしとくこととて。めとらりととる
と長發のやど東の方小下向すしと

私云業字昔書ふりり。ふ。古今に採去
大業字ふ分の載り先おとりのりふと
ゆ疑ウタガハシのこの致

是岡世云スガうけらる橋の八ある小水と業字ふ
路りともふ。一々あそこの中ふ。紀有常
が娘二条の所ふりてとふ。一と八人を八橋と
とて

冷泉流伊和注云八橋とい八人と
つりとも珍ととい後ととい。八人と云い二条
町有常娘定文妹。伊勢小町當純妹。深及内
侍初系女也。三系町ハ惟タカの母と有
常娘と君業女と云定文妹と歎ヤミ女と云
伊勢と唐衣切と云。小町とふ業切と云。常コト

杜若

純妹と浮きを切くゑ、深夜内侍と白き切く

え、初る女の中物の妹五傳秘抄

人より女ヲシテ相やま、玉下し人の、人為女の井筒よ伝

相やまとい相落よむ量の言乃網を小者を男

有たり人の娘乃うづぐ、いうせ此男小相とい

んとあひらり、おあんゆくくやありり人、相や

まふ麻てあぬへさ時ふかくくをあひりく下畧

玉下し道と云細を相落の言ふあり

一嘆ゆふあかとうさいむすけんひまのころつるを相

▲とよ量の言乃うづぐぬへく、秋風吹くうふあられ

相傳ふ業多、言ふ

唯イサキ清抄之後撰み秋、部不入り、扇をとあふさ

るふや、夏の夏の言こき

肖固を言ひ異アツケ其オホク一うりも小叔オコ

風いしあふあじ中吹く、中秋の夫ツラ乃んある

おそ、扇も海へく、程のふ代もれの扇オウ小者

いせこき

九禪抄云わらのとまを切りへく

いし、扇ふあまてく、言ふりひやのこき

▲荒生濂方の我そとい、知カわらる世の人乃言コトまふ

ちうぬるの、鴉カ踏ロ記云あるうめを我あゆふ

月の世乃人の言、ちうぬ使ありといひて家

杜若

小聚ら所の女と一と。皆に果ふありし一りん
とし。後者のりきふい大悲の控跡とあひあて
君の娘をうけ世つらんと御め。み業のあは
ら屋おとくハな代の凡そと志を月やわ
わとくけく化縁うらうらありて。えきや年
五月廿八日。戌の時ふみ十六日。少くは向て終
り終ひわくえ

雜義拙ええきや年五月廿七日の夜。一とけ
よんをけふ時。有常の息女抱よと。あを金せ
て悲の泪と流しと云。君共さん後いあひ乃
闇よまよひと。飛徳さびふあしむ。暗さ
より暗さふありうんとするふあり

一初や。志我ふるまゆる世の人乃暗さやぬ後りり
暗より暗さふ入と。さる東居士ふはと。ふ殿ハ
さる妙よはと

▲月やうくのまよや若の妻らうぬ 志林院よはと
▲本是美如の男とよけ陰陽の神といふなりもと業
身のさるう

五傳秘拙え我が一ハ本の男ありと。い。品家力
のさるも本是の薩埵らると。又云伊奘諾
化して後者ともあり。後者化して業を子とも
る。阿古根浦は傳え月々あはぬの家の流

吐告

1. 伊奘諾、高少く、法湯の二神といひたり。神宗化交の勢を承、伊奘諾の靈迹と云。昔來身と云い、只中の力と云い。

見同抄云業多の法為、大日如來舍那内證、意密也。又云業多の愛深明王、又ハ天照太神。ま日太明神也。

畧日本紀云住吉之化身云云。本受真如といふ名小立る処止観小云、本理三亦真言小の是と云、此字不生、神乃小の名、法陽不測。

花前蝶舞、紛々、柳上、鶯飛、片々金

此詩湯谷不記と

昔男の名をとめて花鶴の白いさる

伊物 五月の花鶴の名をとめてけい若の人の和のうらさる

似らるやくうさるさるさあやめ

あやめの花いりさるさるさあやめ
くとしり、菖蒲ハ想名而本草有立種今分
為三種、菖蒲石菖、白菖是也、白菖蒲、葉花皆
似燕子花而瘦小、其花紫色如飛燕状、又有白花者
淡紅花者皆變種也

あやめの乃ららの、天平十九年五月節會小菖蒲の鬘
と冠小らら、當時もかの髪小らめとひてさるり。

こころ根源小足しり

▲櫻の唐衣の 山姥小泣と

▲袖白母の卯むの宮乃取もまじくとゆりまのりの

皆白さるむをつらり。 衣色目と卯花衣い

ありて白。或はありて白くうらまきこ。此月小足用之

卯花と宮足まきたる白母八田村小泣 東宮ハ安宅小泣ス

▲浅紫の二位のうらまきこ。文武の侍う八階并着浅紫

又持統の侍うハ親王の為服紫五行少と侍也 衣服令

▲花もこころのうらまきこ

●うらまき植木も法を伝われいおもこころとこころ野らん 隆井

▲うらまき植木も法を伝われいおもこころとこころ野らん 隆井

遊行柳

遊行柳ハ下野と奥列との境。芦生とと所小を

右の方小乃地色の流ありとて流と流と流とあり今

小名水とと。又大本の柳ハ垣と流いとじりの

根さしとせり。此流ハ上総より流奥へり小。白

川の雲ともさぬ。是小遊行柳とて名ありしハ。

徳の化者安あやむるを。乃おお遠せり。芦生ハ白

坂江川よりもこころと。あり此柳を足て。乃地色

の。旁とよありとこころ。新古今集河去やもつと

と。介小流文ありやぬべー

▲ゆらとあしぬ流衣法よらやいとくらん

遊行柳

六十余列をのりて聖なる色にゆりうと云ふは、
是の法を遊ばの聖しくい我一遍上人の教と云

大念の家書云此聖いえ祖より十二代目之。大念家
のひ子之。二代目より代々地河法と云々

一遍上人ハ誓願寺小住と 聖者僧之通名也

孔氏傳曰於事無不通謂之聖孔子對魯哀公云所
謂聖人者智通大道應變不窮惻物之情性者也矣

釈氏小聖或い聖人といふは此等小等一

上人者 般若經曰若菩薩下心行阿耨菩提心不

散亂是名上人矣 增上阿含經曰夫人处世有過

能自改者名上人矣 事物異名云称僧上人内
德智外有勝行在人之上名上人矣

▲遊の利益を六十余の廣め六十万人受定代生の
流れをのみ移く流せ小あさひ

六十余列小六十万人を對し〜〜と云ふ委く此等小住

▲此行の上総小よひい〜〜が

先代旧事国造本紀云上海上国造志賀高穴穗朝

天總日命八世孫忍立化多比命定賜国造矣

又云下海上国造輕嶋豐明朝御世上海上国造祖

孫久都岐直定賜国造矣 私云上海上。下海六 帝王編年

記云安閑天皇元年甲寅四月始建上総国矣

本和年紀云上総下総の総ハ木の枝之昔此小よ

有^リ楠木其^レ長^サ數百丈帝怪^ク之勅使^ヲを遣^ハす。其^レ山^ヲを勘
へさせ給ひり。天下^ニ調伏^スの本^ト。依^テく彼^ノ生^ヲを切
りしめり。あ^ラ方^ニ傍^リり。故^ニ小^ノ上^ノ校^ノの伏^下をばえと
総^ト下^ニ校^ノの伏^下を名^ト下^ニ総^トとす。

▲秋津洲 月平の惣名。竜田小波と

心^ノの眞^トと白^ノ河^ノ乃^リ冥^ノ落^トとす。け^レバ秋^ノ風^も之^ノ乃^リ乃^リ
然^レ同^クが^レあ^ラと^レあ^ラせ^テり。班^女小^波と。

白^ノ河^ノの冥^ハ甚^クすと^レあ^ラす。之^ノの^レ名^トと^レあ^ラす。二
あ^ラあり。依^テ、白^ノ河^ノ二^所の冥^トと^レす。然^レ同^クが^レあ^ラ
し。之^ノの^レ名^トと^レす。一^ノの^レ海^トと^レす。依^テ、依^テよ^ク若^ク乃^リ
海^トと^レす。之^ノの^レ名^トと^レす。

つ^ク小^ノ今^ノ青^ノの^レ名^トと^レす。衣^ノ月^も夕^もよ^もあ^ラり
新^レ今^ノ集^ノ羈^ノ部^ノよ^リ。定^ノ家^ノの^レ名^トと^レす。下^ノ白^ノ月^も
夕^もの^レ名^トと^レす。河^トと^レす。撰^ノ政^ノ大^ノ臣^ノ家^ノ哥^ノ今^ノあ^ラ
羈^中晚^況と^レす。之^ノの^レ名^トと^レす。

拾^遺思^集小^上の^レ名^トと^レす。之^ノの^レ名^トと^レす。

東^野別^云分^ク一^ノ方^もま^シく。以^テも^レ海^トと^レす。今^ノ
青^もつ^クふ^ル名^とり^テり。依^テ、依^テよ^ク若^ク乃^リ
つ^クふ^ル名^とり^テり。依^テ、依^テよ^ク若^ク乃^リ
の^レ名^トと^レす。之^ノの^レ名^トと^レす。之^ノの^レ名^トと^レす。
自^護哥^註云^ク猿^ノの^レ名^トと^レす。之^ノの^レ名^トと^レす。我^ノ
あ^ラ人^とを^レ猿^トと^レす。日^もつ^クら^レり。一^ノの^レ名^トと^レす。

よきよきと云ふこと

▲急は経小音小室一白川乃冥さも心ぬ

白川といふは川いなりと云ふこと 愚松拈云橋ぬ仲

奥列の任しきりり一財白川の冥らうくうりて世衣

束とありしめ。後僕ジウホクまじくさうじやのありく通く

きなり。下シモ部ベたつてふ裏フシ一ありしるふ。る仲云

いふぞさうも名もさうい白川と。さうさうと行小

て通るくさうとさうと。いしやさうく風流の

人とさう

▲らふくいはり小波と。さあさとも成佛ハ鶴及芭蕉少流

▲老らる馬よいあり経たるるるるる

韓非子曰管仲從桓公伐孤竹春往冬返迷惑失道

管仲曰老馬之智可用也仍放老馬而隨之遂得道

大和物語。タスハハルも尽て経くちるりさうと。約小すうせてりり

▲後芽すや袖小杉の秋の暮

新古今集雜と不入。た糸門カミ通光ミチミツさうく。下句ハ

忘さぬ夢とありぬらとさ。河と云寄風キキウ懐キミ而ニ

えりすとありさう。東野別云み文字ホウ芽ユメ屋ヤのらと。

秋小懐キキウ而ニ。花よ紅葉ハナふとさうりる世との暮と秋

想オモとんハ。只袖の個とあり教失ぬるとさうと

秋の暮キしとあり。忘さぬ夢とさう。後世の暮と秋

夢とさうとあり。忘さぬ夢とさうとさうとさうと

吹風吹くしありしうき

自撰奇詠云ありしうきや

柳小枝ありし。浅茅せのちね小枝るねる。我カ純ハ

あひ小くつるまへし。中畧 忘れぬまを吹風うら

ハ。浅茅のま乃うらうしと。浅茅せのちねまよ

ア。浅茅く小枝果のせ。あひつゝゆくとわらるねる。

畧ハ浅茅まをわらうとやと云ふしと下畧

▲露分衣うてらんまハ 裾衣く。ぬの装束く。或ハ心

分衣。ま分衣の敷し

。夏冬の露分衣うらぬまのりよあつるまゆ地の衣

▲朽木の柳枝さびて ぶひくとくえ何ハ暖色小枝と

。新古 朽木の柳枝乃柳まうらぬまを言ふ志のりれする

▲霞あひ乃いさふりく 霞あひ乃い右邊よ霞と

。霞足よりえ霞くらりま柳の霞あひ乃い右邊よ霞

▲河ハ柳朽ゆ 柳旁色葉集云河ハ柳とい川

のこゝふさう柳と云ふ

。新玉集小柳乃吳多を河ハ柳といと

▲柳小星霜多ありしうら 星霜とい年月といふは同一

杜牧集云経幾年日幾換星霜

白氏文集云荏苒星霜換矣 千載集序云あつるの

ま秋とあつる。せいのり。あつるまのり

▲鳥羽院の小柳依る氣 露清出家一ありしゆはま

依及之衆寧法ハ西乃橋小波也。多羽院ハ殺生石
 小波也。職原太全云上北面諸大夫四位五位任
 之是令昇殿下北面不昇殿但白河院時始置北面
 之是院の侍と小波と云。今今の侍と庵と云。
 礼記曰君之南嚮トウゴウの侍とタテカト云云。礼記曰君之南嚮
 蒼陽之義也臣之北面蒼君之義也カ矣
 周易正義曰不易者其位也天在上地在下君南面
 臣北面カ矣。夫選曰北面稱臣南面稱王カ矣

▲新古今カ小

拾芥抄云新古今集九卷元久二年

三月廿六日依後鳥羽院院宣參議右衛門督通

具大藏卿有家右近中将定家前上總介家隆右少
 將雅狂等撰之上皇有御合點被定有カ序カ真名カ親徒
 假名撰政書之カ哥カ數千九百七十八首カ矣

八重云抄よの号教十九百八十八と云。

迦来風御抄云新古今集ありありの集ハカ
 初人の人小のりあり。ふゆえん人の此集と云
 るいふくありと云云。

乃の名不流あり流る柳陰志りして紅蓮と云つれ
 新古今集交部歌あつと云。西のあり

東野別云カ天のらりしてなをさひ小柳の
 陰不流ありの流るると云云。なをさひと云。

猪内小立と申すつとてと云ふ。此ノ眼と云ふ
魚裁イサザ申す他ヒと申すつとてと云ふ。此ノ眼と云ふ
見らへうと云ふ。つとてのつ文字と云ふと云ふ。此ノ眼と云ふ
あひとと云ふつとてと云ふ。此ノ眼と云ふ
つとてと云ふと云ふ。此ノ眼と云ふ
一ノつとてと云ふ。此ノ眼と云ふ
暑ヒヨキ死シと云ふと云ふ。此ノ眼と云ふ
一ノつとてと云ふ。此ノ眼と云ふ
下シの舟フネの舟フネと云ふ。此ノ眼と云ふ
此コノ舟フネの舟フネと云ふ。此ノ眼と云ふ
と云ふと云ふ。此ノ眼と云ふ
あつめのやうなる形あるを柳ヤナギと云ふ

▲馬帽子侍衣 馬帽子ハ卒於婆小町小波也。侍衣ハ松風

小波也。

▲つとてと云ふ。此ノ眼と云ふ。此ノ眼と云ふ
▲つとてと云ふ。此ノ眼と云ふ。此ノ眼と云ふ
一念と云ふ。義寂云言一念者以事實究竟為一念
非唯生滅刹那等謂同佛名歡喜回向願生此事得
成以為一念矣 選法集云言一念者是指上念佛
又十念者義寂云說專心稱佛名時自然具足如是
十念非必一々別緣慈等亦非數彼慈等為十矣
▲唯タラシ一ヒト愛メの肉ニク小チすク彌ミ施セのチぬクと云ふ

般舟讚曰一念之間到佛國即現真容菩薩衆
往生禮讚曰至十声一声等以佛願力易得往生

▲此界一人念佛名西方便有一蓮生但使一生常不退

▲此花還てまふじうひと上生ふんるぞうんり

五會法事讚曰此界一人念佛名西方便有一蓮生

但使一生常不退此華還到此間迎

言ハ此界ふく尸念仏と稱し極楽よ一の

蓮生とて其の人命終の時此蓮花をりて來て

迎とす上生極楽の九品乃家上と云ふ

觀經小経

▲釈迦及小滅一弥勒いりてせと 牟利達小町小経

▲南無や彌獨淨命頂礼 彌濁といひ弥勒の智水と我ふ

彌陀といふと南無彌獨淨命ハ美盛小経

▲超世の悲願 當麻小経

▲他力の舟小のり乃乃 淨土宗小おのり自化力と

林とるる源ハ竜樹菩薩の十住毘婆沙論小難易

二乃と到トゆと是則自化力の云ふ但し

しく自力化力と云約ハ聖賢大師の淨土論注

小始と出ら名同之 聖光上人云自力他力聖

道淨土相對所論也聖道修行修三学経多却故名自

力淨土行信佛願順次往生故名他力矣

化力の舟乃といひ極楽小経

勸修念佛之記序云 履承天皇 他力の由不憚さし
苦海に波を志のこゝ樂む心の原不ありふらりころり
とありぬ

▲彼等ハ東家居士小波と。一葉の舟。帝貸狄蜘蛛。紅
の起り。自然居士小波と

▲其外玄宗華清宮少宮前の楊柳寺前乃云々

三射詩云王建華清宮詩酒慢高樓一百家宮前楊

柳寺前花内園分得温湯水二月中旬巳進瓜矣

此侍ハ玄宗皇帝華清宮を修り楊貴妃と遊
覽せしむと修り侍のふ回抄小記せり畧之

玄宗帝ハ楊貴妃小波と 華清宮ハ大明一統志

三十二日華清宮在西安府驪山下唐太宗建以温

湯所在初名温泉宮玄宗改曰華清宮治湯為池環

山列宮每歲臨幸内右碧霜九龍長生等殿久廢今

湯存焉矣 又楊貴妃小記と

▲當時洛陽や清水寺のち一色不尺一滝浪と為

せり一色不令色の支さと。修本の柳忽不楊柳
観音と別是今不絶せぬとめく。利せあふさ
歩ととふ比たり

楊柳観音の支。此修本修り清水寺の観音と之り。
但修本の柳忽不楊柳観音と別是修本と之り
文のうごくと 帝王編年記よ此前株者可造観

音木也ナリと云。又 釈云よへ指庭前テ株拵キナカマ曰我以是擬木
悲像材ニと云。案どらり株拵ハ木の根元。木乃さうり
りぶたしむじ。其外今今者相浴及テ字釈按多しを朽
木の柳ノと云。ゆらゆらと云。或云楊柳觀音ハ
朽木の柳乃似不レ妙也。観音慈心慈悲ノく免レ也
角も柳の樂欲不レ應同トと云。楊柳の喜ハ不レ麻カガ
か。故不レ熱シと云。六観音不レ直クと云。

観音懺法ホウ不レ楊枝淨水シツスイ唯願大慈トと云。文と唱テ楊
枝トと云。観音ノ水と云。何レなる也。請観音經云

毘舍離國觀音手中握諸藥楊柳而レ是洒病人ニ矣

千手陀羅尼經云若為身上種種々病者當於楊柳枝

手ニ矣

高峯録云觀世音菩薩現慈悲相聖故潔眉

灣如翠柳ニ矣

蹴鞠乃奕の面ヲ

公羊傳注曰蹴鞠以足逆踏也ニ矣

劉向別録曰蹴鞠者黃帝所作ニ矣

傳玄彈碁賦序

曰漢成帝好蹴鞠ニ矣

魏畧曰太祖愛之每在左右

矣 日ハむレく蹴鞠の始ハ拾遺シ綱ニ云フ漢ノ月明ノ天

皇乃帝ノ時ノ始トと云。たハ今ノ著シ同クハ文武ノ天

不室九年小始トと云。是レあレ及ク。案どらり日ハ中

紀ハ皇極ノ天ノ皇ノの時ニ時ニ中ノ大ノ兄ノ中ノ長ノ強ノ子ノ法ノ真ノ

守ノの根木ノの下ニて鞠とラハシマシマシと云。ゆらゆら

用明ノゆらゆらノ流ノと云。月ハ白ク

△日本の本流校せんく 日本無のりく。一本無。二本
無。五本無。二本無。りく。あきた。日本無と尊し
とらく。親長に記云四本懸松々柳提チヂ矣

鞠秘書云序家小ハ無のねに本。又柳榎楓松。又松三
本。或又紅葉一本。多人よハ切立として竹とに本なる
ころく。尺素往来云近日於禁中可有蹴鞠御會

候随而懸之庭被莊嚴候櫻良柳異楓坤松乾各棟
奇木怪株被移栽候 上下畧
。二本も二本も松ハ家家のものりくハ作ら花らん
同。皆松のにやうでハ庭あつ人のまゝ庭と松とけ

△若小教あり皆乃音 鞠ハ序破急キツあり。序小鞠シラの
長のびくく小蹴シラ破ハ序破の蹴やうく。急ハ蹴シラ系
の蹴シラ候。鞠の長つめくくく人よ若小鞠の教一
けくろくと。若小教ありといふ

△柳櫻とくくくせく 此ハ盛久小流と

△沟コ屋スの薄洩ヒホり乃白シロいも 沟屋ハ序屋と

端シラ有リ鉤カケ以テ掲ケ卷マ之ヲ因テ名ク簾シダ其ノ簾シダ青翠キョウソウ色ノ故ニ名ク翠簾キョウソウシダ
一ハ夜ノあけくまハひとハの終るハ小ハくハの薄りハ乃ハ白ハいハもハ也ハ

△は例の虎乃引ヒキ縁ヅミもろくくいふくく乃系ノのりノ柳ヤナギ
よの乃ノくく 源氏柏本タマキ也ハ夕ノ旁ノのハ柏ノ本ノ

右築門ミカド督カミりく鞠ノとリ終ル乃ハ系ノ。女ノ之ノ宮ノの柳ノは
るハ横ノ屋ノの内より出るハ縁ノくくハ屋ノのあがりる

よ。世との宮を又その。なると督むひとる。取意
く。烟の虎ハ猫のる。

野王按猫似虎而小能捕鼠為糧矣

夫。人々ハ烟の虎ハあつて。たつと。もなと。うら。うら。あ。ん

△是ハ老々ハ柳色の袴衣も以たり

然も柳色の袴衣と云ふ。禁裏政要云柳色宿

老人着用之矣。衣色曰云柳と云。條ハありて。ま。し。

~~~~~と云ふ。二月と用。一ハ。柳の衣ハありて

色。~~~~~の。柳の衣ハ~~~~~ありて。~~~~~

~~~~~。鏘抄云元永元年正月廿六日。乙辰。園白柳

下重紺地平緒矣。柳色の袴衣ハ云々。二月と著。

用。~~~~~。凡。於。為。帽。子。ハ。卒。於。婆。小。町。小。江。と

▲老木の柳丸カワ~~~~~と云ふ。

文集二十八絶句。詩云柳魚。気力。條先。動。池。有。浪。文

氷。尽。閑。矣。柳丸カワ~~~~~と云ふ。ハ。柳の。凡。小

~~~~~と云ふ。~~~~~と云ふ。

▲柳花苑カハシと云ふ。伊呂波字類抄云柳

花苑。双調樂也。體源抄云柳花苑。新樂中曲。本

者云。柳花。恐。而。天。曆。内。宴。之。日。有。儀。宣。被。改。恐。字。定

置。苑。字。或。名。柳。花。塩。樂。云。負。保。親。王。譜。云。件。舞。延

曆。遣。唐。時。生。久。礼。貞。茂。取。傳。舞。也。即。賜。内。教。坊。於。御

前。奏。之。渡。大。食。調。曲。於。雙。調。忠。房。朝。臣。改。之。矣。

岷江入楚云此樂上古小舞ありき。今ハ渺渺と  
きく。河海云此舞也乃欣之。如吉祥天女舞の袿采  
々静々々々。婆羅門僧正持来々々。大唐よハ人の  
死しうら時あつじく樂を化りて葬送の時号を  
とら之。此柳花苑も人の葬送小化りうら樂く。叔吹  
て尺されハ香の發る。ふ處うらうて檣擲を弄さ  
てこれハ。彼死人蘇生しうら。それうら香乃亦よ用  
ろ之々々。己上岷江入楚

▲歌詠の菩薩 誓願寺小波と

▲懐小報謝の素も是ことありと

報恩謝徳と云と畧しと報謝と云と

觀念法門云報謝佛恩由来称本心上下畧禮記曰

謝其恩謂之報兵史記大宛列傳曰与烏孫遣使

數十人馬數十匹報謝兵

▲玉をぬけらも云乃柳のいくよりさんと

右 〇後々々々系うりうけてハ香をむすぬけらも云の柳

▲夕洲の鳥 湯谷少波と

▲別道の曲小ハ柳條と縮

三昧詩云張喬寄維揚故人詩離別河边縮柳條十

山万水玉人遥月明記得相尋处城鎖東風十五橋

柳條と縮といハ唐よハ柳の枝を以備しと雜

別の人小あらくハいをくゆくもやうてぬきとのり

柳

木のよこたりのくはりのをさく

玉葉

○流から菴田川系の柳梢ハその玉葉よりより俊恵

説文曰柳小揚也兵陸佃云柔脆易生兵揚同類縦

横顛倒植之皆生兵本草曰時珍曰揚枝硬而揚

起故謂之揚柳枝弱而垂流故謂之柳兵

羽衣

三穗神社在駿河国有度郡所祭一座也神名帳頭

註云三穗律姫兵旧事神社本紀云三穗神社檀原宮

天皇時大戸日別太神出現鎮坐兵本朝事跡考云

昔神女飛來懸羽衣於松枝漁人取之神女失衣不

能飛屢求之不畀焉遂相約授衣神女悅而飛去其

後又來於是土人立祠奉之兵一云此所有三穗神

社羽衣社兩社三穗社在平林中羽衣社去平林數

十歩在沙陵之下兵今案三穗神社羽衣社所祭

別也彼神女とよみのると云ハ此羽衣の社と云ク

神社考云風土記古老傳言昔有神女自天降來曝

羽衣



羽衣於松枝漢人拾得而見之其輕軟不可言也所謂六銖衣乎織女機中物乎神女乞之漢人不與神女欲上天而無羽衣於是遂與漢人為夫婦蓋不得已也其後一旦女取羽衣乘雲而去其漢人亦登仙矣長明海道記云昔稻河太夫と云人天人漢松の下に樂を調て舞たりと云くそのひ舞たり彼天女人のひらりとひいて飛をくと雲よ入るをひとらんれば一川の面影と為せりを史拾ひおとく漢松寺の宝物と云りねらり此寺よ舞系と云くへく法雲と婚りす。そのまぐみ孫舞人氏とす。二月十二日常系會とて寺中の大雲と云く

▲凡早の三種の浦廻を云く船の浦人さりく波路うま万葉集才七作者未詳

凡早の三種の浦廻を云く舟の船人さりく波路うまは、万葉集才七の二に入ふ人云く漢と云く。一本よ上のみ文字凡早と云く有。浦廻の融は漢守。八巻五抄云凡早の三種の浦廻河國と云く。又抄云同名有。万葉集才七云和羽也年。其見て姫嶋松原英人屍哀慟作河邊宮人。其よ。

凡早の三種の浦廻の舟の船人さりく波路うまは、万葉集才七の二に入ふ人云く漢と云く。一本よ上のみ文字凡早と云く有。浦廻の融は漢守。八巻五抄云凡早の三種の浦廻河國と云く。又抄云同名有。万葉集才七云和羽也年。其見て姫嶋松原英人屍哀慟作河邊宮人。其よ。

▲是の二條の松原の抄云くはうとく漢史と云く

羽衣

神社考云三保松原在駿河国有度郡有度濱北有  
富士山南有大洋海久能山嶮於西清見関田子浦  
在其前松林蒼翠不知其幾千万株也殆非凡境誠  
天女海童之所遊息也矣 くわくわくと云名は遠乃  
作老の名分るる歟長明海乃記云宿河たまを  
云抄云安閑帝御宇於駿河國有度濱天女降  
現る為歌彦道守氏翁者傳其曲矣

▲万里の好山よむら忽ち起り一櫓の月は白初て  
詩人玉屑四云千里好山雲乍歛一樓明月雨初晴  
詩の意也遠く作らぬ又といふも過さず

▲心ゆくも色づく

後拾  
○いづれかこゝに世にさびしき人ありて天の羽衣を

▲まゆみづを分て流し人涙をよと係の松原よ

後拾  
○志き涙は流し分ての波まよりの處てまよと係の浦には

▲凡ゆるるるのうね波まよとんとく物さぞ人やゆきしん

是ハ瀟湘の八景の内遠浦波悦の歌之下句い物とねまよ  
ゆり人くとまよえけハ景のさへ皆次泉中納言為相の作

▲松の葉の盤のおまきり  
天智天皇夜盡云松の葉名常盤葉

後拾  
○あすあすつる名の常盤葉も風もさるるはあしをあれ

▲波の音るるは松の音よ  
古今茶雅抄云海よるるは松の音

波の音るるは松の音よ其のまよと又天女流るる

羽衣

▲天人の羽衣 長阿含經廿卷曰四天王身長半由旬  
衣長一由旬廣半由旬重半兩矣 神社考云風土  
記云其輕軟不可言也所謂六銖衣乎矣

▲天人の立褰 往生要集云如彼物利天雖快樂極  
臨命終時立褰相現一頭上花鬘忽萎二天衣墜垢  
所著三腋下汗出四兩目數眇立不樂本居是相現  
時天女眷屬皆悉遠離棄之如草偃卧林間悲泣矣  
▲天の原ありさひるん處るゝる路をひてり湯をく飲も

元々集云丹後國風土記曰比沼山頂有井其名云  
真井今既成沼此井天女八人降來浴水于時有老  
夫婦其名曰和奈佐老夫和奈佐老婦此老等至此

井而竊取藏天女一人衣裳即有衣裳者皆飛上但  
无衣裳女娘一人即身墮水而獨懷愧居爰老夫謂  
天女曰吾年見請天女娘汝為兒天女答曰妾獨由  
人間何敢不從請許衣裳老夫曰天女娘何存欺心  
天女云凡天人之志以信為本何多疑心不許衣裳  
老夫答曰多疑无信率土之常故以此心為不許耳  
遂許即相割而往宅相住十餘歲爰天女善為釀酒  
飲一盃吉万病除之其一坏之直財積車送之于時  
其家豐土形富故云土形里此自中間至于今時便  
云比沼里後老夫婦等謂天女曰汝此吾兒暫借住  
耳宜早出去於是天女仰天哭勸俯地哀吟即謂老

羽衣

夫等曰妾亦以私意來是老夫等所願何發獸惡之心忽存出去之痛老夫增發瞋頭去天女流淚寂退門外謂鄉人曰久沉人間不得還天復在親故不知由取居吾何々々哉拭淚嗟歎仰天哥曰

夫の系ありさけんいあくらあけりひりあさるも  
遂退去而至荒塩村即謂村人等云思老夫老婦之意我心无異荒塩者仍云比沼里荒塩村亦至丹波里哭木村柳樹木而哭故云哭木村復至竹野郡解木里奈具村即謂村人等云此処我心奈具志久乃留居此村斯所謂竹野郡奈具社坐豐宇賀能賣命也 已上

私衣の丹波風去記のちと今安小智りあけりひりあさるも  
定いあけりひりあさるも

▲迦陵頻伽姨捨よほと天後加茂よ記と

いりあさる かすさこ 又つりくともいりあさるも  
えきあさるいりあさる女のりくともいりあさるも  
といりあさるいりあさる

▲天人の舞樂 拾芥抄云天人樂大食調曲也無舞矣

體源抄云天人樂新樂此樂和述部大田磨取作也  
東大寺惣供養之日天童於樓上令行道奏之  
從安小くくく天人の舞示ハ只天人のあけりひりあさるも  
えきあさる 雜阿含經曰時有六天女各乘宮殿凌

虚而行、彈奏、清琴、我當歌舞、天の舞系、揚奏、記、

▲天よ仍ちとてぬを、蘇子瞻韓文公廟碑云、惟天不容

偽、馬融忠經、天地神明、篇曰、天無私四、時行、上、畧

丹後国風土記云、天女云、凡天人之志、以信為本、兵

▲霓裳羽衣の曲、揚奏、妃よ記、

▲吾妻遊ひの、駿河舞、此、時、く、め、成、ん、伶、家、よ

東遊とく、く、ゆ、ま、け、徳、よ、記、す、り、私、天、女、が、交、り、ま、

治、て、為、被、舞、一、を、監、觸、と、す、り、く、袖、中、抄、云、昔、し

駿河國より交、後、よ、神、女、の、あ、ま、ら、ご、り、て、ま、ひ、し、と

中、雙、の、ま、ひ、の、び、ほ、く、て、ま、ま、と、今、の、駿、河、舞、と、て

あ、ま、ら、ご、り、し、ま、ま、ら、い、は、し、也、と、し、陪、後、云、

禁、裏、と、く、ま、ま、と、加、太、舞、と、云、是、の、駿、河、舞、と、大

嘗、會、よ、ま、ま、と、こ、女、み、く、云、駿、河、舞、し、女、み、と、今、を、

神、前、と、く、ま、ま、と、東、遊、と、云、く、東、遊、譜、云、先、一、二

次、次、駿、河、舞、次、求、子、加、太、於、呂、之、個、子、高、簾、双、個、也、

▲そ、ま、久、聖、の、天、と、ま、ま、二、神、お、世、の、右、十、方、世、界、と、ま、め

し、に、空、の、派、り、も、な、る、れ、ど、く、久、聖、の、ま、ま、と、い、名、存、り

或、抄、よ、二、神、ハ、伊、奘、係、る、伊、奘、並、き、と、云、と、云、他、

天、地、お、定、ま、る、り、既、に、國、常、立、き、の、れ、何、は、始、り、と、

素、す、り、よ、水、二、神、ハ、天、神、才、地、の、所、神、泥、土、煮、る、る、

沙、土、煮、る、と、指、く、云、云、公、望、私、記、云、天、地、割、判、泥

未、乾、尔、時、初、生、之、神、也、故、云、泥、土、也、其、後、漸、々、堅、固、

羽衣

沙土既成是尔时土地之形容而所名也 兵

久望とい空をいそん松河之。他ち方よ久望の月  
た久方の都た久方の雲井井つけり。花撰和歌  
式よ月と久望と云。古難怒よ空と久望と云。万葉  
仙是抄云久方の空也世界と建まするの天比之天  
地のるよりして八方ともろく。ゆれの下比の國を  
ざれい塵所と云。花つとめれい地方に維もろし。  
細りよ上天の誓りるるなれいえーく望と  
えりよとて久望のそとつとつとつと

十方世界ハ楞嚴曰世為遷流界為方位汝今當知  
東西南北東南西南東北西北上下為界過去未來

現在為世

▲月宮殿の有板玉斧の修理長と

西陽雜俎云大和の初、鄭仁本と仁表と云者有附高  
山よ藤子忽よ路よまて人のうく寢るるとんて  
と寢る人僕を枕とてててててててててててててて  
を以て合めよと路の如丸其四角あり有八百三千  
とを以て合めよと予もを中の人教るると別僕と  
冥く尺すらに斧鑿ありとててててててててててて  
頭中のやうなるものとてててててててててててて  
長い法たて。さる砂よはす

月宮殿ハ起世経曰佛告比丘月天子宫殿維摩正

等四十九由旬四面垣牆七室所成月天宮殿純以天銀天青瑠璃而相間錯二分天銀清淨每垢光甚明曜餘之一分天青瑠璃亦甚清淨表裏映徹光明遠照亦為五風棋持而行

▲白衣黒衣の天人の數と云ふに分て一月の日の天と云ふ

惠心三界義曰月宮殿内三十天子十五人青衣天子十五人白衣天子月内常有十五天子後月一日白衣天子一人入月宮殿青衣天子出宮殿外如是次第十五日唯十五白衣天子在月宮中故月圓滿後十六日至三十日毎日白衣天子一人去青衣天子一人入月宮故月輪漸缺減也

おとろの女を云くる事よ東道女をくましくかたりしつゝ嫁せぬ女のつゝくつりあまかゝぬ天人のつゝく只女の悪名を云く

▲かうしを空の彼を云くと かうしとい柳まきまき子と云かまうともひまうしと云てほうしと云む之つゝを本文よかうしとかくいふあうしと云

▲月の桂 西陽雜俎曰月中有桂高百丈下有一人常斫之樹創随合其人姓吳名剛文西河人学仙有過謫令伐樹 本草綱目云月桂治小兒月蝕瘡時珍曰吳剛伐月桂之說起于隋唐小説月桂落子之說起于武后之時 唐書大率拱四年三月有月

桂子降于台列宋仁宗帝天聖卯年八月杭列靈隱寺月桂子降如雨指以進呈寺僧種之得二十五株カハラ世説云徐釋九歲或人日月中每物當益明徐曰如人眼中看瞳每必不明三界義云世入云月中有桂者為是實乎答新心論曰須弥山南有大閻浮樹高四千里其影現月中其世人見彼智月中有桂冰實有桂又瑜伽論曰大海有魚鱉等影現月輪故於月內有黑相現其

▲長壽殿たるひさより久遠の月の桂の花さくらん

後撰集末巻上よ入紀異之カ也初之よ延嘉法師が石ころにさくらんときふかのふいさおれい万本の花も咲くこ小室よあもたむひけい月の桂も花さくらんときふ

▲天は凡雲のかみひら吹とらよ乙女の姿あまりーとめん  
 古今集難上よ入良岑宗貞あへ河去ふふ節の舞姫をさよあるときふ舞姫とて乙女よありと雲のひら吹とらよ  
 し女の姿の舞姫とて乙女よありと雲のひら吹とらよ  
 ころよいれとて雲のひら吹とらよありと雲のひら吹とらよ  
 傷心遊眼と有たう集よい良岑宗貞と有古今集難上  
 云古今集よいれとて乙女の姿あまりーとめん  
 さんば傷心遊眼と有たう集よい良岑宗貞と有古今集難上

▲三保の湯月夜見浮島亡の雲つらきも駿河の名所あり  
 あり。島亡い島亡を敷よはらと

▲その上天地い何と隔んむ垣の内外の林のれ末よと



玉垣の内外とついでる日本の地名を玉垣内國と云く内  
外とい修路の外宮内宮と云く世々の帝天照大神の  
内宮と云く玉垣内國の別名也云々日本記云大已貴大神内國  
曰玉牆内國矣纂疏云玉垣内國謂神國之義也矣  
夫玉垣内國の別名也云々日本記云大已貴大神内國  
曰玉牆内國矣纂疏云玉垣内國謂神國之義也矣  
長久代天皇の御衣櫛と云く玉垣内國の別名也云々  
拾遺集入後人多云云真玉櫛と云く玉垣内國の  
別名也云々日本記云大已貴大神内國曰玉牆内國矣  
玉垣内國の別名也云々日本記云大已貴大神内國曰玉牆内國矣  
玉垣内國の別名也云々日本記云大已貴大神内國曰玉牆内國矣  
玉垣内國の別名也云々日本記云大已貴大神内國曰玉牆内國矣

▲簫笛琴瑟篪

簫、竊名云簫、肅也、其声肅々而清也。文獻通考云  
簫、世本曰舜所造、其形參差象鳳翼、長二尺、亦雅曰  
編、二十二管、長一尺四寸、曰箏、長尺二寸、者曰箏、蔡  
邕曰簫、編竹有底、大者二十三管、小者十六管、長則  
濁、短則清、以蜜蠟實其底、而增減之、則和風俗通云  
一尺、竊名云二尺四寸矣  
笛、風俗通曰笛、滌也、所以滌邪穢、納之於雅正也、長  
一尺四寸七孔、笛音一定、諸絃歌皆從笛矣 前漢  
律歷志曰、笛、黃帝臣伶倫大夏西方嶰谷竹取造笛矣

大平御覽曰黃帝伶倫昆溪竹取作笛矣

琴白虎通曰琴禁也禁止邪以正人心也矣山海經

曰南方之神祝融生長琴是也搖山始作樂風矣

廣雅曰伏羲氏作琴長七尺二寸矣桓譚新論曰神

農氏始削桐作琴絲繩為絃廣雅曰神農琴長三尺

六寸六分五絃隋音樂志曰周文王加二絃為七絃

矣禮記云舜作五絃琴以歌南風矣爾雅曰大琴曰

離二十絃矣處胎經曰天帝使執樂神持九十九

弦之琴矣琴論曰伏羲氏削桐為琴面圓法天底方

象地龍地八寸通八風鳳池四寸合四氣琴長三尺

六寸象三百六十日廣六寸象六合前廣後狹象尊

卑也上圓下方法天地也五絃象五行六絃為君小

絃為臣文武加二絃以合君臣之恩矣石記曰琴之

琴矣今之琴矣此也今世之月之琴矣今之琴矣

て別多し隋音樂志曰箏十三絃所謂秦聲蒙恬所

造也矣傳玄箏賦云彈箏以骨瓜矣阮瑀曰身長六

尺應律數也弦有十二四時度也柱高三寸三才具

也二手動應日月務也今十三弦其一以象閏也矣

笙篥文獻通考曰劉熙執名曰笙篥師延所作靡多

之樂蓋空國之侯所好也矣圖會曰又有云豎笙篥

胡樂也漢靈帝好之體曲長二十三絃豎抱於懷中

兩手以奇奏之俗謂之豎矣隋音樂志曰笙篥出自

西戎

西域記華夏舊孟樂府錄云其制二十有四絃郭知玄曰二十五絃兵風俗通曰漢武帝合樂人候調依琴作坎侯坎侯本名也

▲孤雲の外よそらして落日のくれがよひ

大江定基入道寂照詩笙歌遙聞孤雲上聖衆未迎落日前共世待をやくそつら。孤雲といふ序のやそとそく。孤といふことと門下。落日の夕日とそとそく。鮑明遠東門行曰古々々落日晚不共

▲蘇迷盧のふとらうして蘇迷盧梵語也西域記云唐

言妙高旧曰須弥又曰須弥樓皆訛山高八万由旬出自金輪際在大海中日月回其半腹諸天所游舎

四面各一色所謂東白銀南琉璃西玻朧迦北黃金。小笠原ももなまなくふあらめくれあひよそらうのふ世説部

此後之最後は落日の如く緑の波よそととくは白の波につけくけそとやくせたり。是れ水の二色と器とくおりの色とつらうやうに表くといふは一川と器とくふのそはわりのふ

○草根おのこのふりばおりてめらうとふのそもぬの夜の重

▲浮橋が拂ふ所よ 浮橋をふとひひけり。駿河也家祇名不集云浮橋うねいふお二十里也。然し所を二里とす。あさうり南く。あさうけ糸とのあひあはれと。あさうりあひあはれと。下畧 昔事の道の記云 駿河也家祇浮橋が

系と云いゆくなりて遠く廣き神御心あるのよそ  
 の海小い不登り足さるふの藤原くくく 又陸奥及青陸  
 よ同名を。東園紀行云い系者、海のことよりいひて  
 若菜のこの名のいひはるるにありて、ははるる人  
 名付たりていひはるるがのつら。神代のはるるいひは  
 りていひはるるいひはるるいひはるるいひはるるいひは  
 相傳え若い海とよほて若菜のこの名のいひはるるいひは  
 かりよりいひはるるいひはるるいひはるるいひはるるいひは

風雅  
 〇吹あつて風をたはむ根の根凡し袖あはれはるる系  
前考後  
後言

▲若とめくく次 廻雪の舞をとり融るはる

▲南はゆ令月天子が地大勢至 懐捨るはる

▲八はたさのふ紙々の 宗箱口傳集云舞はれ右左と  
 舞く。せんつ翁の舞と約し次。是返団のあはるる  
 丸を丸とせめとね柳子とせめくと論るて五七十二  
 代の神の舞とかきたりこくく 拾芥抄云舞蹈

事再并置笏立左右左居左右左取笏小并立再拜  
 紙々のいひはるるはるる

拾芥抄三回音  
 〇柏木と推のまがえよちりてあはるるさるるあはるる

▲そ名も月の色人の三五夜中の 月の色人といひぶし。  
 是の月の色人たえまのまをまのまいあはるるいひは  
 ら。他、系が待よこあ夜中、新月をこくくまをまわ  
 せよれい月の色人といひを

▲滿於ま如の氣くまり降於ふは國土成統

おん明よすへりま如いはいよはす

▲七室シウシム充シウシム後シウシムの家とありー 三界義云堯卒天上雨摩

尼ニ雨種ニ々ニ莊嚴室ニ 七室ハ源氏供養よはす

▲足高山 在富士之東。萬葉仙史抄云葦原の五の炭

あり葦原大明神と申す。地令剛客  
の火日也。又葦原のあ山の首ハ東海乃の野路ノノ

神社考曰愛鷹大明神本地毘沙門。又曰不動明王

矣 富士縁起曰愛鷹明神所謂竹取翁是也カキ矣

▲富士のさる根幽よ成て天はくまのまありまらんとまら

富士縁起云貞観五年秋白衣神女出現雙立舞遊テヒ

都良香富士山記云貞観十七年十一月五日天甚

晴仰觀山峯有白衣美女二人雙舞山嶺上去嶺一

尺餘ト矣

ま 富士の縁の風よたよふ白をると天はくまの袖よとらる

